

やっつてはいけない  
リストはない!



鬼頭 周  
ぎとう あまね  
[PSソリューションズ社長兼  
ソフトバンク常務執行役員]

AI(人工知能)、フィンテック、IoT、ビッグデータ……。ソフトバンクは新たなビジネスを考える際に「やっつてはいけないリストはない」というDNAがあるようです。それはどんな分野にも当てはまります。

その1つが農業。当社は2015年より農業IoTソリューション「peasens」を提供開始しました。新規就農者の獲得を目指す導入先が増えています。熟練農家の感覚を数値化することで、若手の農家にも分かりやすく栽培のノウハウを伝えることができるようになったのです。日本の農業は危機的な状況です。しかしながら可能性に満ち

溢れている。山梨にイチゴ狩りで訪れたイギリス人が日本のイチゴに感動し、「是非とも輸出して欲しい」などといった反応は日常茶飯事。だからこそ、そこまで馴染みがなかったIoTと結びつけることで農業という産業全体の活性化が図れます。

「e-kashi」は農業センサーやネットワーク、クラウド、スマートフォンで構成され、圃場を監視して気象・環境データをモニタリング。そのデータをクラウドが蓄積し、「e-レシピ」と呼ぶアプリケーションに取り込まれます。すると、生産者はシステム側から何をどうすべきか助言を受けられる。ある作物では、農業の経験が全くない人でも、ベテラン農家が生産するよつな収穫量・品質を得られる事例が出てきました。

その「peasens」も昨秋に第2世代へと進化しました。ポイントにはAIを活用した「自動化」。施設内の温度によって窓を開閉するといった単純なロジックではなく、栽培している

生育ステージや糖度の高低などの栽培の方向性、地域特有の栽培ノウハウをAIが学習することで、現在すべき作業を判断して制御できるようになります。

具体的には、AIによる園芸施設(ビニールハウス)の環境制御や液体肥料の混合・施肥、また、水田や畑、温室での灌水を遠隔制御によって自動化するサービスを18年中に提供開始する予定となっています。

カーナビゲーションが世代を重ねるごとに機能を増して自動化が進んだように、農業でも自動化という要素を組み合わせることでできるようになってきました。もちろん、農家による手作業も必要ですから、まさに「ハイブリッド農業」と言えます。

当社のような会社がソフトウェアングループの一員として存在する意義とは何か。それは通信というインフラを使って社会の課題を解決できるからです。課題とはニーズがあるから発生します。そして通信でヒトやモノをつなぐことで諸課題が解決で

きるようになってきたのです。

私は新しいビジネスを始める際の「決まり事」はないと考えています。ソフトバンクの新規事業提案制度に採用されて事業化が決定し、農業分野での潜在課題を解決するために開発された「peasens」を引き取り、当社のサービスとして始めました。

他にも金融では、みずほフィナンシャルグループと提携してブロックチェーン技術を活用したインターネット上での取引を実現するプラットフォームの研究開発を進めていますし、クレジットカードが普及していない国ではスマホで決済できるサービスを拡大しています。

新しいビジネスを考えるときに私が強調することは「自分たちのつくってきたものを否定する」ということです。蓄積してきた知恵や労働力を違う領域で活用するためには、そういった考えが必要になると思うのです。PSソリューションズの経営思想の根底には「やっつてはいけないリストはない」があるのです。